

## 古屋野外科学教室

教室員は古屋野宏平教授、石崎戊助教授、大和田野浩一講師、金武三郎助手、多田孝平副手、岩永光陸、田辺市之丞、松本淳、中村定正医専、飯卒業生、溝口美津子教補、中岡茂三技術嘱託、田川元技手、小使の猪股憲一氏、給仕の小松フミ子、深堀昭規の両氏、それに山口ユリ子看護長以下二十二名の看護婦であつた。

### 被爆時の状況

古屋野教授、大和田野講師、金武助手、松本先生、数名の看護婦は外来診察所で、石崎助教授は、助教教室で、岩永、田辺先生はじめ他の教室員は病棟及び医局で夫々被爆す。

教室員は一応穴弘法山の中腹に避難す。この時居合わせぬのは石崎助教授、中岡技嘱、田川技手、深堀給仕、松岡、大坪、川崎、武藤、多良の諸看護婦である。更に金比羅神社近くの民家に一同登り、そこで互に治療看護す。

古屋野教授は救護打合わせのため新興善に下られる。金武、松本先生同行す。

石崎助教授は火傷ひどく角尾学長の元で治療をうけ、外科の横穴塚に移され遂に十二日死亡する。

大和田野講師は十一日夜自宅に帰り九月六日死亡。

重傷の管看護婦以下三名は避難先の岩永先生宅で死亡。八月十八日教室員の名を貼出す。当時勤務員三十七名中死亡者十二名。又同日松岡看護婦始め教室関係屍体を火葬に附す。

### 死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
官 嘱	石 崎 戊
助 教 授	大 和 田 野 浩 一
講 師	中 岡 茂 三
技 嘱	田 川 元
レ ン ト ゲ ン 技 手	猪 股 憲 一
小 使	小 松 フ ミ 子
給 仕	深 堀 昭 規
副 主 任	松 岡 ト シ エ
心 得	菅 ハ ル ヨ
〃	大 坪 和 子
五 年	後 川 チ ヨ ミ
四 年	川 崎 信 子
三 年	武 藤 ミ サ 子

## 原爆十周年の日を迎えて

岩 永 光 陸

月日の経つのは早いものです。一時は死を明日にひかえた私でしたが、悪運強く早や十年の月日を重ねました。まだ遺された使命があつたものと見えます。

死を覚悟して、当時の状況をかいて友に送つた文中より古屋野外科教室員一同の被災状況を再録して、亡き十四の霊に捧げたいと思います。

古屋野教授御夫人、石崎助教授御夫妻、大和田野講師、雇員田川君、中岡君、深堀君、及び菅君、松岡君、大坪君、後川君、川崎君、武藤君、小松君の諸嬢です。

「人の将に死なんとするや、その言や正し。」とか、八・九空襲より早や十週間よくもまあ今まで生きのび得たものだと、今更ながら不思議に思う。神の御恩寵の深さに感謝せざるを得ない。当時を想い、その後を想う。全く奇蹟の連続といつてよい。漸くにして己の身に原子爆弾の威力の現れるを知る。九月十三日赤血球二七〇万、白血球二八〇〇、生と死との岐路に立つを知る。死を或は旬日にひかえた私は、与えられた二十有余年を省み、感謝してその決算をしたい。

昭和二十年八月九日、全くいやな日であつた。悲惨といおうか、地獄といおうか、とにかくその惨状を私がどれほど大げさに述べようが、その実状の十分の一も言えない。あの日午前六時頃当直室に目をさました。

先月末より病院に泊りつゞけであつた私は聊か疲れをおぼえていた。木曜日御存知の視診日だ。しかし八・一空襲のため手術棟風呂場の傍に二五〇疋爆弾をうけ、手術場は使われない。大和田野先生と広島空襲のことなど話しつつその日の計画を立てた。毎日定期的に発令される朝の空襲警報も今日もまた発令された。しかし今日は珍らしく早く解除された。十時頃古屋野先生は二階繃帯交換場に御顔を出し、重症患者のみの視診を下された。その後すぐ先生は外来診察に向われた。

私は八・一空襲患者の導尿を命じ、医局にもどつた。服をかえ外来治療に行こうと降りてきたとき、森田君が導尿の準備ができたお知らせにきた。全く生きるか、死ぬかは紙一重の差に驚きいる。若しこのとき呼ばれなかつたら、恐らく廊下にて圧死するか。若し助つても放射能の直射をうけ、数日中にお陀仏になつていたに違いない。

病棟一階十六号室でまさに導尿せんとしたとき、ピカリと恰も大きなマグネシウムをたたいたような白光を感じた。その後は全く無意識と言つてよい。ぱたりと瞬間的にベットとベットとの間に倒されていた。上からはコンクリートの天井が頭に背に腰にと落ちてくる。全くこのときは死んだと思つた。不思議なことにあたりは真暗くなつてしまつた。その長さは三十秒程とも思へたし、或はもつと長かつたかも知れない。

フト自分の息の手にかゝるのに気付いた。頭は一時ボウーとした感じ、そつと手を動かしてみる。動く。体はおさえつけられて起きられない。しかし何んとか身動きはできる。特別に痛いと思われる所もない。「生きています」と感じた。しかしあたりはまだ真暗だし、物音もしない。生埋めかな、と直観した。看護婦の名をよんでみる。「小崎、森田」返事

はない。更にもう一度大声にて叫ぶ。はじめてかすかな返事、彼女等を元気づけるため、そして自分に勇気を与えるため、数度「頑張れ」と叫ぶ。「先生、大丈夫ですか」「うん大丈夫、生き埋めだからぬけ道を見つければ、俺の方にはない。」と叫ぶ。その頃漸くブーツと明るくなり始めた。火事と直視、「燃えぬうちに抜け口を見つければ」「小崎、元気が」「ハイ、元気です」「森田、大丈夫か」「ハイ」私は暫くあつちこつちと穴をさがした。明るさが加わつたのでどうにか頭の方に出口がありそうなのに気付いた。小崎が幾分泣声で「先生、こつちに出口がありません。こつちですく」とゆう。声の方にベツトの下をくぐりぬけて出た。そしてその破壊力のすさまじさに驚いた。

天井は皆おちて歩けそうにもない。後続弾もある。生をおびやかされることの如何につらいか、全くお話にならない。かわいそうに患者は天井でつぶされている。「足から血が出ます。先生歩けません。連れていって下さい」と小崎は泣きだす。泣く小崎を背負つて廊下にでた。そして始めて外の景色をみてびつくりしてしまつた。

これが死の色というのであろうか。空気が灰色をしている。見渡すかぎり立っているものはない。今までうつそうと繁つていた構内の二抱えもあるような楠の大木も、すべて根元から折れている。「新型爆弾、広島」とひらめいた。とにかく後がこわい。すぐ横穴に入るか、山に逃げようと病棟入口迄よろめきついでてきた。中央廊下はつぶれ、多くの下敷になつた人々が声をかぎりに助けをよんでいる。しかしどうにもならない。そこに集つたもの、小崎、森田、山下、坂上、三井それに田辺先生と私、傷をうけていないものは誰一人いない。田辺先生も頭部から出

血している。早速白衣をやぶつて全員に応急処置をした。

その頃すでに手術病棟二階石崎助教授室附近から火をはいている。そこに背の高い人が顔中血だらけでくる。すぐ呼んで処置をする。よく見ると耳鼻科の長谷川教授である。看護婦達が泣きだす。田辺先生としかりつゝ、とにかく火に囲まれぬうちに穴弘法の方に逃げよと叫ぶ。火はすでに教授室、医局をとりまいている。自分の持物はとにかく、委員としてクラスのアльブムだけはたすけたいと思ふが到底近よれない。しかたなく、荒れはてた調外科との間を通りぬけ、高南病棟の高台に上つた。振りかえれば早や全市火と煙りの海、外科は医局そして病棟三階図書室より紅蓮の焔をあげている。想い出の古屋野外科、今一握の灰とならんとしてゐる。愛着をおぼえ涙がでてしようがない。

外科の者はなるべく散らないようにに言いながら穴弘法の中腹に至る。谷間に古屋野先生を発見してはじめてホツとする。大和田野先生、金武先生、田辺先生、松本先生皆元気、外科看護婦諸嬢も教名いる。古屋野先生は前頭部と肘関節部に受傷、しかし軽傷にて先づ安心、先生が「隊長を手当てしてくれ」と言われる。診れば管君は顔面、上膊、背と全身に傷をうけている。脈も悪い。手当ていつても何もない。唯圧迫止血のみである。診察着をやぶつて繃帯をするだけ、小松君も可なり重傷である。火傷がひどい。つける油など勿論ない。唯空気に触れぬようにと繃帯するのがせい一杯である。

三菱兵器工場の方より真黒な煙りがもうくくと上る。空一面真ツ黒、そしてその下面は赤く照り輝いている。突風が起る。トタンが舞上る。遠くではドラムカンが爆発するものすごい音、人が泣く、いや地が泣く

とはこのことであろう。穴弘法あたりのおの大木も皆倒れている。石は転び落ち、草という草は焼けたまぶれている。

古屋野外科の者でこゝに見えぬ者、石崎先生（下の方で火傷の手当をうけていられたと誰かが言うので一安心）中岡、田川、深堀の三君そして松岡、大坪、川場、武藤、多良の諸嬢である。大坪君は大部分傷らしく本館診察室前で自分でアンブタでしようねと言っていた由、どうかと心配す。一同とにかく金比羅山を越し、治療をうけることに決定し山に登る。しかし菅君をはじめ重傷者は歩けぬと言う。一ヶ所にまとめて寝せ、古屋野先生の後を追う。

金比羅神社の附近の民家に一同落着いていられる。こゝで薬品を入手。大和田野先生が悪い。山に登られるまでは元氣であつたのに何故だろう。嘔気甚しく、脈も悪い。古屋野先生の御指示によりマーキユロ、強心剤、モト等で治療をなす。大和田野先生は自分で後腹膜出血ではなからうかと心配される。全く八・一空襲時の患者の症状とよく似ている。しかし今思えば皆放射能のためであつた。古屋野先生は救護打合せのため勝山国民学校に降りられる。松本、金武先生も手当をうけに同行、私は後の責任をまかされ、ふみ止まることにする。

金比羅山陣地より軍医がいらないから診てくれとの頼みにより兵隊約五十名を診る。上半身裸身で戦鬪中だつたため殆んど全員が熱風による上半身二度火傷である。これをすまし、再び穴弘法の方にもどろうとすると兵隊が通してくれない。上官にかけあうも許されず、ふんがいして兵隊のすきを見て山の中を下る。道のない所を約一時間にて漸く穴弘法につく。あつちもこつちもうめき声で一杯である。まだ何んの処置もし

てないものばかりである。疲れた体も忘れて、治療をし、なるべく一緒に所に集めてねかす。

向うの丘に漸く長崎医大本部の旗が立つている。そこに行こうと谷間を渡る。途中誰か「岩永」と呼ぶ。見れば同級の樋渡君（角尾内科）である。「ひどかつたなあ、大丈夫か」「うん傷は大したことないが、少し寒くなつてきたので、今晚こゝえ死にはせんかと心配していた」という。みればユカタ一枚、彼は数日前不幸腸チフスの疑にて高北病棟に入院したばかりであつた。暖い所につれて行こうとするも元氣なく、少し歩くと疲れる。日は暗くなる。やつと角尾内科の高橋先生に連絡し、御世話を頼む。（彼も不幸にも闘病むなし、八月十五日御母堂に看守られつゝ昇天した。次弟浩二君は医学部二年で即死。御母堂のおなげき如何ばかりかと思われる。）

本部には角尾学長先生が傷をうけておられる。調教授始め角尾内科医局長がつきつきりて診ておられる。可なり御重態らしい。本部には石崎先生も居られるとの話により探すも暗くて仲々見つからない。「石崎先生」と二三度叫ぶ。すると「おい」との答、みればすぐ前の所に痛みをこらえて坐つて居られる。先生はその日助教教室にてレントゲンフィルムを窓近くで見っておられた由、原爆落下と同時に手にして居られたフィルムが発火し、頭部、顔面全部にひどい火傷を受けられている。あのハンサムな面影は全くなく、顔面の皮膚は全くやぶれ、顔は二倍位にはれあがつて、痛みも激しそう。でも何の薬もなく、治療してあげられない。

外科の横穴に葡萄糖があるから持つてきてくれと言われるが、まだ外

科は炎々として燃えつゞけていて、到底近よれそうにもない。それを言ううがつかりされるも仕方がない。先生の治療は調先生にお願ひして、本部にてカンパン百人分をもらひ、再び穴弘法の神社の所に重い足をひきずりながら登る。

今迄燃えていなかつた浦上天主堂も遂に燃えはじめた。幾多の犠牲をはらい建てられたこの古い建物も一夜にして廢墟と化す。兵器工場の方は今尙爆発音が絶えない。神学校、山里校ともにぐれんの焰につゞまれている。向いの稲佐岳も中腹まで燃えつゞけている。火事のためこの山の上も昼の如く明い。附近より藁を集め皆をねかしたのは何時頃であつただらうか。暫くまどろんだと思う頃ブーンと爆音がする。敏感になつた負傷者は敵機ではないかとおびえきつている。練習機のような低い音や々安心して味方機だから心配するなと言う言葉の下からシュル／＼つゞいてドドンとの爆発音。全くびつくりした。皆の怖れることおびたゞし。残酷といつてこれほど残酷なことがあるか。生命からがら逃げのびた私達に再び爆弾の雨を降らすとは、思わず口より出る言葉は「畜生」の一言である。まだ爆音は去らない。頭上を行きつゞもどりつする。今迄逃げそうにもなかつた重傷者が地をはつて山の中に逃げこむ。しかつても、しかつても言うことをきかない。そしてそのまま雑木林の中で息絶えた人々。かわいそうに誰一人見るものもなく召されてしまつた人々。

此の様にして八月九日の夜は明けた。死への驚怖にさらされつゞ全く生命の十年もちゞまる思ひの此の一夜も漸く東の方よりしらみかけた。少しはまどろんだであらうか。痛む足腰をさすりつゞ薬品を何んとか手

に入れたいと、専門部三年の深山君（実によく働いてくれた。頭と腕に自ら負傷しながらも終始一緒に救護にあたつてくれた。しかるに何んたることか、あれほど元氣であつた君も九月一日忽然として原子爆弾の犠牲となつた。）と病院に下つてみた。無残！一所として昔の原型を留めていた所はない。想い出の手術病棟も全く廢墟と化している。よくもまあこれほど焼けたものと唯々驚くばかり、病棟の方は幸い三階と一階の一部が燃えたのみ、外来に行つてみる。本館は地下室に至るまで燃えてしまつている。治療室、診察室何も残つていない。唯、治療室に一つ、前の廊下に五つ、殆んど骨ばかりになつた燒死体が転つているのみである。性別さえ区別できない。或はこの中に大坪君がと思ひながらもどうにもならない。山の上で首を長くして待つてゐる負傷者を思ひ、持てるだけの薬品をもつて山に帰つた。

私達は終日救護に當つた。私に終始加勢してくれたものは学四、岩切君、専三深山君、影浦内科長島婦長を始め数人の白衣の天使達であつた。四月空襲と趣を異にし、骨折、切断創などの大物は少い。ガラス、木片によるおびたゞしい破片創とそれにも増して多い放射線による火傷である。持つてゐる薬と言へばアルコール、ヨードチンキ、そして僅かのチンクエール（これは殆んど昨夜使つてしまつた）だけである。食物もない。畑にころがつてゐる南瓜、芋で飢えをしのぎながら山を登り、谷を下つて負傷者を診て廻つた。

夜は畑のあぜの間に芋づるをきて寒さをふせいだ。このまゝ傷ついた人達を山にねせてはおれない。飢えと寒さにひどくなるばかりである。

外科の横穴では角尾学長、高木教授、山根教授、石崎助教授の四先生

を收容、傷ついた古屋野先生、調先生などで診て居られる。四先生とも仲々重傷らしく前田婦長など数名がつきつきりである。

救護の手は延びてこない。軽い人達はなるべく帰る様に言う。私も重傷の菅君を始め家まで帰れそうにない六人をつれて十一日夜彼岸の自宅へと引きあげた。併し数日の苦闘も空しく菅君を始め三人が遂に召されてしまった。後かたづけをすませ、十七日再び長崎へと出かけた。来てみれば尙屍体はあちこちに転つている。臭気は暑さにあてられて猛烈をきわめる。

病院に行つてみると、古屋野先生は御老体にもめげず、家には御重態の御奥様を残されたまゝ、毎日焼跡にこられ、学長代理として総ての事に當つて居られる。不幸にも炉粕町の御自宅は強制疎開のため七月始め城山町にお移りになつたばかりで、死ぬために移られたような破目になつて残念でならない。先年唯一人の御嬢様を疫痢にて亡くされ、又三男研三君をグアム島に捧げられ、そして今又最愛の御夫人を原爆のために失われてしまつた先生の御不幸、しかも肩にかゝる大きな責任、黙々として日々を勤められる先生のお姿をみると、全く頭が下るのみ、そつと後姿を伏しおがむ気持ちはどうすることもできなかつた。

先生の命により八月十八日古屋野外科転員の消息をはりだすとともに、看護婦松岡君を始め関係屍体を火葬にふした。当時勤務員三十七名のうち死亡確認七名、行方不明五名であつたが、その後放射能障碍によりつぎ／＼と死亡者が増し、遂に十二名に達した。

石崎先生は火傷と放射能障碍強く、古屋野先生を始め多くの人々の努力の甲斐もなく、十二日昇天されました。御夫人も山里町の御自宅にて

なくなられたようです。

大和田野先生は負傷後三日間山の中で過され、人の肩につかまりながら長年にて、彼岸の御自宅に十一日夜帰られました。放射能障碍強く、口内炎、齒齦出血、下血、高熱そして脱毛と、初めてみる放射能特有の症状で種々と治療をしてあげるも好転せず、輸血すればその注射跡が化膿する仕末、悪戦苦闘の甲斐もなく、九月六日昇天されました。先生が死の三日前かゝれたお手紙を再録して、この想い出の記を終わりたいと思います。

#### 代 筆（口授通り）

八月二十九日付速達いただきました。

貴君が出崎される頃、頭髮が少し抜けかゝつたようだという処でしたが、其後数日を経て、殆んど脱落、引続いて高熱（三八・五度前後）及び咽頭の痛い感があり、其の翌日は咽喉だけでなく、口腔内に到る処に何か出来物ができ、齒齦は腫れあがつて、齒は浮いてしまい、便は黒い御存知の軟かい血便であり、熱は四十度を越すに至り、誰でも医者共が言つているように、そして事実亦そうなつているように、あと数日の命だと顧念しました。やはり気持ちよくないですぞー！！

ロジノンやロツクでは追付かず、川棚から輸血に来てもらい、其の翌日即ち、九月一日こゝ共済会に到着きました。入院翌日迄は熱も益々高くなり、頭痛と口腔内の痛み、及びそれによる完全なる食物摂取不能をつゞけ、やはり経過は一定したものと感心しました。今日は幾分ましなようです。この後は病院から通知がありましよう。

ピン／＼としている人達が姿をこと／＼くくらまして寄りつかず、数

人の教授を中心に学生、生徒何名かで「長崎医科大学仮本部」という案内所ができてゐる由、持駒の数が少なければそれも止むを得ぬかと、結局そのようなことになりはてるかも知れませんが、実に涙なしには考えられぬことです。中略。暴言多謝。人の正に死なんとするや、其の言や正し、と訂正す。御健斗を祈る。

九月三日

大和田 野 浩 一

最後に己れの負傷にもかゝらず、終始古屋野先生をたすけ、疲れた体をおして、救護にそして焼跡整理にと、日々協力してくれた松本淳先生、山下静子看護婦に心から感謝をさぐげたいと思います。

## 廣島と長崎の原爆

栗原富士太郎

長崎原爆の災を直接経験しなかつた私に、長崎原爆について筆を採る資格は無いかも考えられますが、次の様な理由で、原爆の厄をあわやと云う処で免れ得た幸運者の一人と云う意味で、又特別の思い出もあり、その思い出を新にして記す次第です。

原爆の前五月迄、古屋野外科に居ましたが、当時、尾道市立厚生病院の外科医長として出向いて居られた山根先生（第二解剖、外科と教室を

同じくし、広島被爆の日、軍医として四国へ出張して助かられた幸運者の一人です）が、五月応召され、その後任として井上院長自身、長崎迄来て口説かれ、古屋野教授からも亦、君は兵役關係が無いのだから召集の積りで行つてくれと言われ、当時の戦争の様相から、關門海峡を一度渡つた後は果して帰れるものやらと、一度は固辞して随分決つていた気持ちに鞭打つ様にして赴任したのでした。

お陰で、大学に残つて居れば、八〇―九〇%の被爆の確率を逃れ得た訳です。人間万事、運命の岐れ路と云うものを今でもつくづくと身に感じます。

さて、尾道に行つて見れば、それ迄敵機からの比較的安地帯視されてゐた中国沿岸だけあつて、防空壕も殆んどなく、綜合病院の市立病院と云うに、あるのは泉水と玄關にある家庭用の小さいコンクリート製の箱型水槽一ヶが防火用水と云つたあんばいで、明眉な瀬戸の内海を前に防火演習とか燈火管制等、何処の国のことだろうと言つた至極のんびりとした防空体制でした。お蔭でこちらものんびりが感染してしまつた。困るのは食糧丈と云ふ訳で、借家の裏庭へ家庭菜園のつもりでトマトやナス、キュウリ等を植え、ささやかな收穫を得ては淋しい食卓を飾つて喜んで居たのでした。そしてひよろ／＼と育つた野菜を眺めては、嘗つて、長崎の解剖時代、恩師高木先生と一緒に教室の空地に苗を仕立て、解剖実習のくづを特大の水がめに捨て、置いたのに雨水が溜り腐熟したのを肥料にやつた処、葉っぱばかりが化物見たいに黒々と厚く大きくなり、実は一つも成らなかつたこと等を懐しく思い出して、先生へも畑の成績等書き添えてお便りしたものでした。当時学内一の雷親父の称あり

入学早々より学生をすくみ上らせて居られた先生のお手紙にも、いつも風雅な教室菜園のことが書いてあり、今度はかぼちやが沢山獲れた等を書いて居られたのを、懐しく読み返したことが今でも忘れ得ない思い出となつて居ります。

処が、この、のんびりしていた瀬戸内海も、間もなく岡山が、次に呉が、続いて因島造船所が焼かれる事になり、あわてゝ家屋疎開だ、待避訓練だと騒ぎ始めた所へ、広島のパカドンです。その日は、丁度朝食をすませ出勤前、ラヂオで、広島へ敵機一（二？）機侵入、爆弾投下、被害極めて軽微の放送を聞き、気にもとめず出て行つたのですが、翌朝になると何処からともなく広島被害が想像以上との事、ラヂオとは大分食違ふ噂が、伝わつて来る。その中に、ボツ／＼、比較的軽い被害者が外来へ来始める、見ると身体にランニングシャツの形がボツクリと残つて居る。続いて段々とひどいのが来る。聞くと、遙かな空で、ピカリと光つて、一発ドーンと来たら、身体が焼ける様に熱くなり、全市が潰滅して自分も全身火傷を受けたと云う。そんなことがあるものか、馬鹿なことを言うなと一笑に附していたが、益々避難者の症状はひどくなる。外来に来たのが、下痢を訴える、齒齦出血がある、紫斑様の皮下出血がある、訳も分らない中に待合室で、バタ／＼とあつけなく息を引取つて行く。始めて之は只事ではないと云うわけで、色々と聞く中に、その後色々の書物等で御承知の惨事が段々と分つて来る。未だ軍でも原爆の発表はありませんでしたが、井上院長と、之は普通のものではない、伝え聞く原子爆弾（当時我国に、マツチ箱位の大ききで、戦艦を吹き飛ばすものが出来たとの希望的なデマを喜んで居た頃です）と云うものではない

かろうかと、素人の直感と云うか、飛躍した当て推量をしていましたが、図らずも之が当つていた訳です。

そして、原爆の翌日、果の命で広島へ救護診療に行つたのですが、市の前の前の駅から歩いて、始めて市が見える地点に来、一眼その被害の跡を見て、何とも彼とも言い様のない驚きに一時呆然とし、それ迄は尙残つていた米英への闘志も一辺に吹き飛んで了つて、「之では戦争は出来ん」と叫んだのを、そしてその次には、何の理由もなく、大変だ次は長崎だと直感したことを今でもはつきりと忘れることは出来ません。何も彼も不足だらけの応急診療をして原子野に野宿して翌日又尾道へ帰り真先に筆を採つたのが、高木先生と古屋野先生でした。

広島状況と、色々被災者から聞いたこと、投下時の模様、それに白い衣服を着けた部分は火傷が軽いこと、ピカリと来たら、何でも良いから手近かの堅固なものゝ陰に入ること等、色々と書き連ねました。

然し、之も後で考えると、此の手紙が長崎へ着くのも長崎の原爆より遅かつたのでした。いや、永久に着いて居ない訳です。

間もなくラヂオで、長崎の爆撃、相も変らず、損害軽微の見込と聞いた。翌々日には早くも長崎から被災者が病院に来、聞いて見ると、広島そつくりの話です。只詳しいことは分らず、浦上駅附近の工場でやられたとのことで、広島と思ひ合せて、大学も到底逃れなかつたことを想像して暗然となるだけでした。

間もなく台湾人で眼科（？）に居た人が、妻子の遺骨を持つて立寄られ、略々詳しいことが分り、その中案じて居た学部一年の妻の弟が第二解剖講堂で、高木先生の講義中に被爆し、幸いカスリ傷程度であつたの



が、約十日後、下痢、出血、高熱等の原爆症状で倒れ、妹達がその遺骨を持って郷里奈良へ埋葬に行く途中、立寄つたりして、段々と大学の惨状の予想外にひどいことが明かにされて行つたのでした。

その後広島へも数回、救護に行き、その悲惨に悲しみ憤り、之に対する医学の無力さを嘆き、又翌年十一月始めて大学の焼跡を踏み、殊に基礎の焼跡を独り歩いて廻り、懐しい教室跡に焼け残つて立つ、コンクリートの壁だけの建物、解剖実習室の屍体タンクだけが元のまゝで、中にはフォルマリン液に浸つたライヘもそのまゝにあり、実習室のコンクリート床に雨ざらし日ざらしで散らばっている頭蓋骨の、ポツクリと開いた眼窩の空ろさを見た時、更めて、此の人類の悲劇は、もう広島と長崎だけで沢山だ、決して二度と繰返さる可きで無いことを、原子野で独り袖々に折つたことを忘れることは出来ません。

## 調外科学教室

教室員も次々と応召し、当時は調来助教授、木戸利一助教授、佐藤克巳学部卒業生、日高健博医専卒業生、台湾人呉氏、研究補助員の溝田輝雄、青木カズエの両氏、技術雇の金子マサ子氏、それに村山タミエ看護長以下二十一名の看護婦が勤務中であつた。

### 被爆時の状況

調教授は教室（現在放射線科二階の一室）木戸助教授と日高先生は数人の看護婦と地下室で繃帯交換中、佐藤先生と三人の看護婦は外来診察室、溝田研究補助員は研究室、村山看護長は病棟二階、他の教室員は病棟及び医局で夫々被爆す。

尙台湾人呉氏と二川看護婦は長崎市外に居て被爆を免る。

爆死者は研究室の溝田研究補助員とギブス室（現在外科手術室）に居た河田ヒサエ看護婦の二人である。

教室員は裏山に避難し一夜を明かす。

十二日調外科を主体とする救護班を組織し道の尾の滑石大神宮拜殿と岩屋クラブで角尾学長、山根教授その他教室員、学生、看護婦等の治療と看護に当る。尙此の救護班は十八日に解散し、参加した学生、看護婦達は夫々帰省した。